Title	『光の子と闇の子』について（共同研究報告 ： ニーバー研究）
Author(s)	豊川, 慎
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-5 : 11
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2371
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

共同研究報告

【ニーバー研究】
『光の子と闇の子』について

2009年12月5日（土曜日）、聖学院本部新館2階集会室において第2回「ラインホールド・ニーバー」研究会（参加者41名）が開催され、国際基督教大学名誉教授の武田清子先生が「『光の子と闇の子』について」と題する講演を行った。以下、武田先生の講演の概要を記す。

ラインホールド・ニーバー（1892―1971）の*The Children of Light and the Children of Darkness―A Vindication of Democracy and a Critique of its Traditional Defence*が刊行されたのは1944年であり、その時期はまさにドイツと日本の降伏が時間の問題となっていた時であった。ニーバーは大戦後の世界におけるデモクラシーとマルキシズムの相克を見越し、デモクラシーのあるべき姿を本書において批判的に援護したのであった。本書はユニオン神学校においてニーバーに師事していた武田氏の訳出により1948年に『光の子と闇の子』と題して新教出版社から邦訳刊行されたのであるが、それは戦後の日本のキリスト教界のみならず、戦後の混沌としたある時期に一般の思想界でも広く読まれ、大きな思想的インパクトを与えた。武田氏によれば、占領下にあった模索の状況の中でデモクラシーをどう理解するのかという問題、またキリスト教とマルキシズムの問題などの戦後の思想状況に対してニーバーの『光の子と闇の子』が問題提起としての大きな役割を果たしたのであった。武田氏はこのようにまず本書が書かれた時代背景について語り、その後に第一章から第五章まで丁寧に本書の内容の解説を行った。武田氏の解説の中で特に印象的だったのは、原罪観に基づくキリスト教的人間観こそがデモクラシー思想を考える際に重要な点なのであるが、原罪あるいは自己抑制という点なしに日本のキリスト教界の中に社会学的関心が入ってきたことが一番の問題であり、日本のキリスト教界においてニーバーのその点が欠けて受け取られたことは非常に残念なことであったという指摘である。

『光の子と闇の子』の訳者である武田清子 国際基督教大学名誉教授による講演があった

武田氏は最後に本書が今なおどのようなメッセージを持っているのかということを三点挙げて講演を締めくくられた。第一に、自分自身の中に愚かな子と闇の子が共存しているということを自覚することの大切さ、つまり謙虚な自己認識ないし自己絶対化する危険性を見抜くことの大事さ。第二には、異質な他者との共存についてであり、多元的な世界を本当に意義付けるものは自分と異なる他者に対して開かれた目であり、これはキリスト教信仰から来るものであるという点。第三にはニーバーが世界共同体の形成について語っている点である。

講演後には活発な質疑応答がなされ、実り多い研究会の時となり、講演や多くの質疑を聞きながら、あらためてキリスト教、特にプロテスタンティズムとデモクラシーの関係をめぐる学的考察の必要性を認識させられた次第であった。

（文責：豊川慎　聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）

（2009年12月5日、聖学院本部新館2階）